

氏名	岩橋 秀樹
学位の種類	博士(医学)
学位記番号	第 7 0 9 号
認定課程名	防衛医科大学校医学教育部医学研究科
学位授与年月日	令和5年2月17日
論文題目	卵巣癌における腹水セルブロックの診断および予後予測因子としての有用性に関する検討
審査担当専門委員	(主査) 東京医科歯科 教授 宮坂 尚幸 大 学 順天堂大学 教授 板倉 敦夫 東京大学 教授 矢富 裕

### 審査の結果の要旨

卵巣癌は子宮頸癌や子宮体癌の様にスクリーニング検査を実施する手段がなく、多くは進行した状態で発見されるため、婦人科悪性腫瘍の中で最も予後が悪い。通常は手術で腫瘍を摘出し、組織学的な確定診断を行ってから、癌化学療法を追加するが、初診時すでに腫瘍が腹腔内に広がっており摘出困難なことも稀ではない。このような場合、組織採取だけを目的として試験開腹を行うが、術後の回復に時間を要し、化学療法の開始が遅れる要因となる。申請者らはこの問題を解決するために、卵巣癌症例で高頻度に見られる腹水を使ってセルブロックを作成し、それを診断、治療に活用することを考えた。

まず治療抵抗性卵巣癌の代表である明細胞癌に着目し、腫瘍細胞が腹水中に播種しているかどうか、従来の腹水細胞診とセルブロックによる組織診断で比較検討した。その結果、腹水細胞診では腫瘍細胞陰性と判断された3例において、セルブロックでは腫瘍組織が存在することが判明した。すなわち、腹水細胞診では腫瘍の広がり過小評価されている可能性が示唆された。

次に、申請者らは腫瘍免疫に着目し、セルブロック中に存在するCD8リンパ球について検討した。CD8リンパ球は抗腫瘍効果をもつ免疫細胞であり、これがセルブロックの腫瘍細胞集塊に存在する場合としない場合とで、予後に差があるかを検討した。その結果、CD8が存在した群は、そうでない群に比較して無増悪生存期間、全生存期間とも良好であることが判明した。

本研究での腹水は手術に採取されたものを用いているが、これらの結果を考慮すると、今後手術摘出困難が予想される進行卵巣癌においては、腹腔穿刺により腹水を採取し、セ

ルブロックを作ることで試験開腹と同程度の情報を得ることができ、より早期に抗癌化学療法を導入できる可能性が見出された。このことは、今後の卵巣癌治療の新たな戦略を示唆する、新規性のある優れた研究と言える。口頭試問における質疑に対しても、論理的な思考に裏打ちされた適切な回答を得ることができた。

したがって申請者は、博士（医学）の学位授与に値する十分な学識を有すると判断し、合格と判定した。